

# 歌唱学習に対する意識と継続的指導の過程から

## — 保育者・教育者養成校における調査より —

藤田光子

The process of consciousness and continuous guidance to singing learning:  
From a survey at a nurturing nursery teacher school

Mitsuko FUJITA

### 【要 旨】

歌唱に苦手意識を持っている者や歌うことに何らかの抵抗を感じている者の歌唱学習について、意識がその学習に影響を及ぼすのではないかという観点から調査を行った。保育者・教育者をめざす学生の歌唱意識を調査し、その傾向を探り、継続的に学習する中での変化を確認した。歌うことに抵抗を感じている学生の傾向を調査すると、心理的側面からくるもの、歌唱の基本的技術面からくるもの等が明らかとなった。技術的な問題点として、音程感覚の未熟さが原因の1つとしては考えられるが、そこには様々に絡む要因が見てとれた。歌唱に関する学生の意識からわかる傾向を探り、継続的な歌唱学習からみた変化や問題点から指導に関する方向性の一助となった。

### 【キーワード】

歌唱 音楽表現 意識 音程学習

## 1. はじめに

歌唱は、保育者・教育者をめざす者にとって身近にあり、学習の機会も多い。特に短大2年間を通じて様々な科目において歌唱学習を行う。しかし、身近にある歌唱であるが、声を自由に出し、人前で歌唱となると抵抗を感じているものも多く、のびのびとした歌唱ができるようになるまでには多くの時間を費やす必要がある。

そこで、学生が歌唱に対してどのような意識を持っているか、その傾向を探るためにアン

ケート調査を行い、その意識からわかる傾向を探り、「音楽表現」から「弾き歌い」につながる継続的な学習状況からその問題点を明らかにするものとする。

保育や教育の場での歌唱というと、園児の前で弾き歌いをしたり、手遊び等で歌いながら活動をしたり、小学校では音楽の授業をするなど、人の前で歌唱する機会は多く、様々な場面で必要とされているが、本研究では、授業科目「音楽表現」で実施される伴奏を伴う独唱と、音程学習である「コールユーブンゲン」に着目した。

保育所保育指針・幼稚園教育要領において、

「歌を歌ったり、簡単な手あそびや全身を使う遊びを楽しんだりする」<sup>1)</sup>「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」<sup>2)</sup>また「国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、<sup>3)</sup>など基本的な姿勢として、さまざまな歌唱活動をおこなうとともに音楽を楽しみ親しむという指針が示されている。また小学校学習指導要領では、学校現場での音楽の技能技術に関する内容については、現行学習指導要領では、低学年において、「ア 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。ウ 自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。エ 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。」<sup>4)</sup>また平成29年度告示の小学校学習指導要領においては次のような表記がなされている。「(1) 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付くとともに、音楽表現を楽しむために必要な歌唱、器楽、音楽づくりの技能を身に付けるようにする。」「A 表現(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。」「ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。(ア)範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能(イ)自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能(ウ)互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能」<sup>5)</sup>とあるように、「表したい音楽表現を実現するために必要な技能を身に付ける」ための技能の修得が必要であるとされている。「表現領域の歌唱、器楽、音楽づくりの活動においては、複数の技能を位置付けている。例えば、歌唱では、聴唱や視唱などの技能、自然で無理のない歌い方で歌う技能、声を合わせて歌う技能」<sup>6)</sup>これらについてもあくまでも知識的なことや技能習得部分を指しているのではなく、あくまでも「表したい音楽表現」「思いを持った表現」をするために必要な技能であるという考え方である。このように保育所・幼稚園・小学校の歌唱に関する方向性の中で、歌唱指導や歌遊びなどをおこなう際に自由に声をコントロールでき、楽しい表現を作っていくだけの技術が求められているのである。

これまで保育における歌唱表現に関する研究や保育者養成校における歌唱指導に関する研究は非常に多い(2013 加藤 2017 竹下)。本研究では保育者・教育者養成校における学生の意識と継続的歌唱学習の中での現状と問題点の把握に努め歌唱指導の質を考える機会としたい。

保育者・教育者の養成校の学生にとっては、小学校・幼稚園・保育所など子どもたちとかわかり、保育教育を目指すものにとって音楽的分野は非常に大きなウエートを占めているといえる分野である。本学でも音楽的分野には好意的にかかわるものが非常に多く、器楽など鍛錬した技術や知識を蓄積しながら獲得する技能については不安を抱えるものも多く、これまでも技術向上に関する研究に多く取り組んできた。歌唱については幼少のころよりかわかり、これまでの生活の中でも自然にあるものという感覚が多く、嫌いであると感じている学生は日常的に少数であると感じている。

これまでの実態から、歌唱が苦手もしくは抵抗を感じるものは、いわゆる技術面の音程感覚の未熟さからくる音程不安を想定している。幼児や小学生などでも発達の段階においては音程感覚が未熟であるケースは多く見受けられる。また大学生の年齢でのこれまでの発達や環境から音程感覚の未熟さが内在していることは十分に考えられるのである。全員で歌唱している際は気づきにくいですが、単独で歌唱する場合においてその様子が明らかとなる。授業内でその技術について発見される場合もあるが、経験を積みながら、人前で一人歌唱することが困難と感じるようになるものもいる。音程感覚が未熟なままでは、声を豊かに出すことができず、授業や保育のなかで十分に歌声を活かした活動でできなくなる。

しかし、早い段階でこれらの状況に気づき音程が不安定である者に対する手立てをとることのできる解消になると考えられる。

しかし、早い段階でこれらの状況に気づき音程が不安定である者に対する手立てをとることのできる解消になると考えられる。

そこで本研究では保育士・教育者を指す学生が受講する「音楽表現」において歌唱に関するアンケート調査を実施し、その後の継続的歌唱学習に関する意識とその傾向について問題点を明らかにするものである。

## 2. 研究方法

### (1) 調査Ⅰ

①保育士や教員を目指す学生が、歌唱することに抵抗を感じているか。

②その理由はどのようなものか。

対象：平成25年～平成27年（4月）保育士・教員養成校で「音楽表現」履修の学生へのアンケート調査・選択(複数回答)及び自由記述による。162名中142名回答。

③回答から学生が思う「恥ずかしい」の理由と「歌が下手」の定義について自由記述による。

### (2) 調査Ⅱ

対象：歌うことに抵抗を感じている学生の中で「弾き歌い」の再指導受講者7名の自己評価における傾向を調査する。平成26年～平成27年（後期間）実施。

\*記録・アンケートの結果については個人が特定できないよう配慮のうえ、調査に関しては同意を得て実施している。

## 3. 調査結果

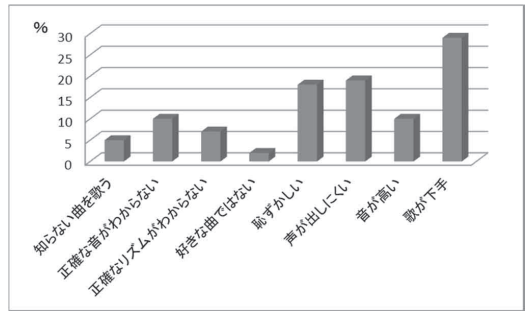
### (1) 調査Ⅰ

「歌うことに抵抗があるか」尋ねたところ以下の【表1】のような結果となった。抵抗のないものが約70%と多く抵抗があるとこと答えたものは約30%程度であった。また、その理由として特に多かったものが「歌が下手だから」が27%、次いで「声が出しにくい」が17%、「恥ずかしい」が16%という結果になった。

【表1】

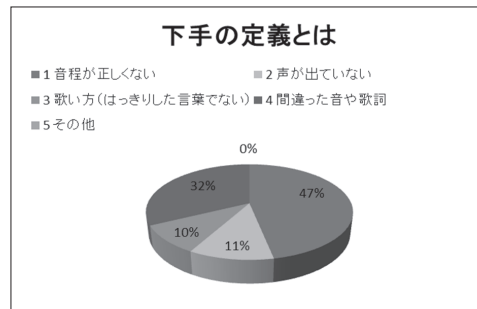
n: 142

	平成25年	平成26年	平成27年
歌うことに抵抗はない	42	31	34
歌うことに抵抗がある	18	11	6

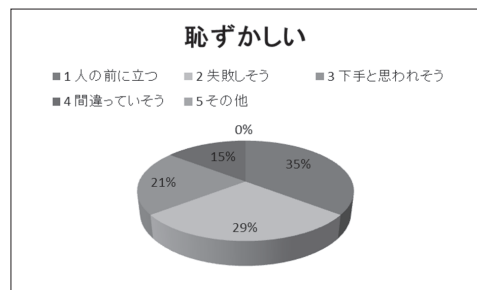


【グラフ1】

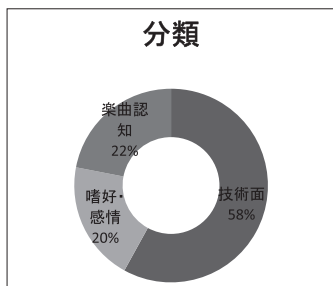
「恥ずかしい」「歌が下手」だからと回答したものについてその理由と定義を自由記述により尋ねたところ【グラフ2】【グラフ3】となった。【グラフ2】では「歌が下手」である定義は「音程が正しくない」が47%、「間違った音や歌詞で歌っている」が32%であった。また、「声が出ていない」が11%、「歌い方（はっきりとしていない）」が10%であった。【グラフ3】「恥ずかしい」の理由については「失敗しそう」29%、「人の前に立つこと」35%であった。「下手と思われそう」が21%、「間違っていそう」15%となった。



【グラフ2】



【グラフ3】



【グラフ4】

(2) 調査Ⅱ

「弾き歌い」再指導の受講者のうち「歌うことに抵抗がある」と答えたものの7名について各自が1週間練習してきた楽曲の弾き歌いについて3段階で、自己評価を行ったうえでレッスンを進めた。自己評価が比較的低いままレッスンに入っている。また現状から見受けられる問題点としては、レッスン時のコメントから楽曲を構成している音程や音符、リズムなど間違えたまま練習を続けている、テンポの不確実、音程感覚が不安定の順であることが分かった。

4. 考察

調査Ⅰにおいて「歌うことに抵抗を感じる」と回答したものは24.6%であった。理由としてあげられるものの上位が「下手だから」「恥ずかしい」そして「声が出しにくい」というものであった。心理面ととらえることができる「恥ずかしい」と技術的未熟な部分からくる「下手だから」内在していることがわかる結果となった。ともに学生が思う「下手の定義」について尋ねてみたところ、「音程が正しくない」「間違っている」という技術的部分の捉えであり、声の質的問題や声の表出に関するものとのとらえは低かった。声の質的問題よりも音程の間違いなどに着目していることがうかがえる。

また、「恥ずかしい」の理由については、「人前に立つこと」「失敗しそう」「間違えていそう」を挙げている。このことから、失敗を恐れることから歌いづらくなっていることがわかり、歌うことに関する垣根をまず取ることが重

【表2】


	回数・曲	自己評価	コメント
①	1	○	よく仕上げている
	2	△	難易度が高めであるが、よく弾きこんでいた
	3	△	リズムの間違いに気づかず演奏していた
	4	△	音程不安
	5	△	練習不足・まちがえたままの演奏
	6	△	練習不足・音程不安定
	7	×	練習不足
	8	×	間違い多い
	9	○	とてもよい演奏
	10	×	弾きこみが足りず人前でうまくいかない
②	1	×	全く譜読みできていない
	2	○	間違えて覚えてしまっている
	3	×	ミスタッチ
	4	×	テンポ
	5	×	練習不足
	6	○	練習不足
	7	△	テンポ
	8	△	弾きこみが足りず間違い多し
	9	△	テンポ
	10	△	間違えた音で練習してきている
③	1	○	ミス多し 音
	2	○	テンポ遅い
	3	○	テンポ遅い
	4	○	歌の間違い多い 伴奏音違い
	5	×	音の間違い
	6	×	音の間違い
	7	×	歌が歌えない
	8	×	リズム間違い
	9	×	練習不足
	10	△	練習不足
④	1	×	音の間違い
	2	×	練習不足
	3	×	練習不足
	4	×	あと一歩 止まる箇所
	5	×	ミスタッチ
	6	△	弾きこんできたためか間違いがなぐ弾けた
	7	△	テンポ不確実箇所多し
	8	×	音 リズム違い
	9	×	練習不足
	10	×	練習不足
⑤	1	○	以前弾いたことのあるもの
	2	○	あと少し
	3	○	よくできている
	4	○	間違えた音多し
	5	×	練習していない
	6	×	練習不足
	7	△	間違えている箇所多い
	8	△	テンポ
	9	△	テンポ
	10	△	ミス多し 音
⑥	1	○	音を間違えて覚えている
	2	○	間違い多い
	3	△	練習不足
	4	○	間違えたままの演奏
	5	△	音の間違い
	6	×	テンポ
	7	△	ミスタッチ
	8	△	テンポ
	9	△	間違い多い
	10	○	間違えて覚えている
⑦	1	△	あと少し
	2	△	テンポ
	3	△	ミスタッチ
	4	△	歌唱音程不安
	5	△	音間違い
	6	△	よく練習できている
	7	△	間違い多い
	8	△	音程一部
	9	△	テンポ
	10	○	試験に向けて

要であるといえる。また音程の正しい歌唱を目指すことを学生自身も強く望んでいることが伺える。双方からの要因が絡んでいるためただ単に「歌が下手」だからではなく、「正しい音程でないこと」や「失敗する恥ずかしさ」が見えてくる。歌唱指導を進めていくうえでこれらの認識の理解が、非常に重要になると言える。抵抗があると答えたものの理由を分類すると、

「曲を知らない・恥ずかしい・声が出しにくい・正確な音リズムがわからない」「恥ずかしい、好きな曲でない」「声が出しにくい・音が高い」などから「楽曲の認知度合」「嗜好・感情的要素」「技術的要素」の3つに分類することができる。分類を割合において見てみると【グラフ4】のようになり、「技術的要素」が58%と圧倒的に多くなっている。しかし、特に「恥ずかしい」という回答では、歌うことが恥ずかしいというだけにとどまらず、「歌が下手である」と感じているものと同時回答しているものが多く、技術的なものと他の内的理由が存在していることが伺えた。技術面の1つは、音程感覚が未熟であり、正確に歌唱できているかどうかかわからず、自信をもって歌唱することができていないケースがうかがえる。

さらには調査Ⅱの対象とならなかったものの中にも少数のものが「歌うことに抵抗を感じる」と回答している。いわゆる独唱(ソロ)での歌唱学習の中で、顕著な傾向がみられた。調査Ⅱの対象にならなかったものの継続的歌唱学習の状況を見てみると「音楽表現」という科目の中での「楽曲歌唱」には問題なく「コールユーブンゲン」による音程練習の歌唱の際、音程感覚の不安定さを表出するものが見られた。「楽曲歌唱」では伴奏による歌唱音程の支え、楽曲の認知度の高さ双方から音程不安が表出されなかったと思われる。しかし「コールユーブンゲン」においては伴奏音の支えもなく、自身の音程感覚を主軸に置いた歌唱であるため、困難を感じるものも多い。次に「コールユーブンゲン」の歌唱学習の事例を2点示す。

(1) 【事例1】では「音楽表現」の「楽曲歌唱」においては特に不安定要素は見られなかったが声量を上げることはできていなかった。「コールユーブンゲン」においては、No. 15aの歌唱において特に苦手意識から音量を上げることができなかった。当初見られていた強拍部の認識の甘さも反復練習ののち改善され、14小節目15小節目の音程の不安定さも改善された。特に2度音程の最初に行うNo. 2の練習を反復的に行うことで効果が見られた。

【事例1】
音楽表現楽曲:「いつも何度でも」「赤とんぼ」「夏の思い出」「早春譜」
「いつも何度でも」について特に音程に関する問題点はない
「コールユーブンゲン」No. 15a


(2) 【事例2】については、「音楽表現」におけるソロの歌唱についてである。授業内での教師との歌唱や全体での斉唱については特別な問題点は見当たらなかった。しかし実技試験におけるソロ歌唱において譜例にある部分で音程が非常に不安定になる。2番においても同様のことが起こっている。

しかし、後期「弾き歌い唱」においては特別な問題点は見いだせなかった。また「コールユーブンゲン」については、No. 12bを歌唱した際上行系の3小節目、6小節目において、音程の不安定さがみられた。授業者の声による反復指導と、楽器音による指導においても改善が見られ、実技試験においては改善されていたが、先に記した「赤とんぼ」の歌い始めの音程の不確定さは改善が見られなかった。主旋律を他のだれかが歌うことや伴奏音から比較的とらえやすいと感じていたにも関わらず自身の声と伴奏のみの歌唱においてはなかなか改善が見られなかった。練習不足がこの音程不安定を誘発している可能性が考えられるが、コールユーブンゲンのNo. 11fの反復練習が3度音程の不安定さを解消することができた。

そのほか「コールユーブンゲン」の実技指導においては、以下の楽曲選択者は音程感覚が安定していたが、No. 28aの8小節目・11小節目の4度の下降音程には不安定さがみられた。

また【事例1】【事例2】に共通して言えることは、伴奏音と他人の声に影響されているということである。伴奏をはじめとする他の音との関係を理解した練習が不十分であることから、伴奏のみになった歌唱の場合、主旋律の音が認識されにくくなり、歌唱の音程感覚が不安



<b>【事例2】</b>
音楽表現楽曲:「赤とんぼ」「いつも何度でも」「アラジン」
<b>【譜例1】</b>
歌い出しの2小節が特に不安定になり、2番の歌唱の際も正しく歌うことができない。主旋律を授業者が歌唱することで解消されるが、ソロの歌唱では音程の不安定さは解消されなかった
<b>【譜例2】コールユーブンゲン No. 12d</b>

**【譜例】**

定になっている。つまり短期的認識を何度もリピートすることがここでは必要となってくるのである。それにもかかわらず、そこまでの反復練習ができておらず、人前での歌唱の際さらに緊張などと言う心理的内的要素も加わるため、伴奏音等の他の要因に左右されることになるのである。実際の楽曲の反復練習だけでは不安要素の解消には時間がかかるため、コールユーブンゲン等の音程練習を十分に反復することが、これらの事象の解決策には近道であると考えられる。音程練習など経験の少なさからくる音程不安についてはこの位置に立ち戻っての練習が必要となる。

またキーボードの音ではうまくいったが、ピアノではうまくいかない。他の人の声にあわせることはできるが、ピアノ伴奏にはあわせられないなどの現象も起こっている。男性の場合、女性教師の声に合わせきれないという例も見られた。これらについては今後の研究材料とした。

調査Ⅱの結果から、「歌うことに抵抗を感じている」ものの中で、弾き歌いの再指導を受けている者は自己評価が低い傾向が見られた。自

己評価では「できない」という苦手意識が全面に表出する場面が多くみられた。さらにレッスン時のコメントから内容を詳しく見てみると「間違えている部分に気付かないまま」「正しい音程・リズム・テンポではない」状況のまま練習を続けているなどの状況が見えてきた。苦手意識からくる練習不足と誤った認識による練習がこの自己評価の原因の一つであることもうかがえる。しかしこれらの傾向は課題曲を限定し時間をかけ反復する機会を増加させることで改善が見られ一定の効果を得ることができた。

## 5. おわりに

本研究においては、保育者・教育者をめざす学生が歌唱に対して抵抗を感じているかどうか、またそれはどのような理由からか検証し、継続的な歌唱学習からみた変化や問題点を事例とともに明らかにしてきた。しかしその多くは複雑に絡み合っている結果となった。内面的にみられる部分、技術的部分、認知に関する部分と多面的にかかわりあっていることが伺える結果となった。

本研究では一方向からの傾向の把握に留まったが、何らかの抵抗を感じている学生の認識については一部明らかになったと言える。音や音程を正しくとらえることは歌唱学習のうえでは重要なことであるが、それと同様ほど内在する心的要因も重要であることが分かった。特に歌うことに抵抗を感じる者たちであるからこそ、その部分についての状況をわれわれ指導者も認知し指導に当たる必要がある。

## 【引用文献】

- 1) 保育所保育指針 2017年告示 フレーベル社 p.21 p. 29
- 2) 保育所保育指針 2009年 告示厚生労働省幼稚園教育要領2009年 文部科学省
- 3) 幼稚園教育要領 平成29年 告示 文部科学省 p21
- 4) 小学校学習指導要領 平成20年告示 東京書籍 p. 75
- 5) 6) 小学校学習指導要領 平成29年告示 文部科学省 pp. 98~116

**【楽譜】**

標準版 コールユーブンゲン No. 12d, No. 15a, No. 28a,  
2011年 全音楽譜出版社

**【参考文献】**

- ボブ・スナイダー著 須藤貢明・杵鞭広美訳 音楽と  
記憶認知心理学と情報理論からのアプローチ  
2003年 音楽之友社
- 加藤明代 保育における歌唱表現を考える～保育者の  
記述から見えてくるもの～2013年常葉大学短期大  
学部紀要44号 p95～103
- 竹下則子 保育者養成校における歌唱指導技術の育成  
京都聖母女学院短期大学研究紀要2017年 p82～92